

# 俳句集

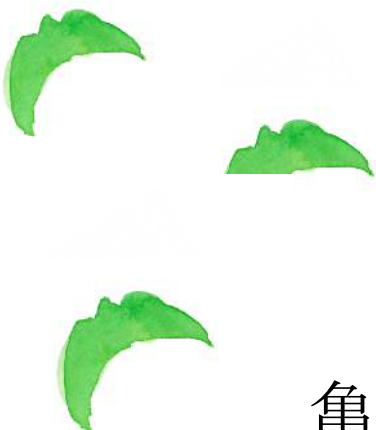


令和三年度 第十七回

亀山市民俳句会

（応募句 一般の部）

主催 亀山市・亀山俳句会



選者

石井いさお

坂口緑志

前田照子

とき

令和三年十月三十日(土)

ところ

亀山市文化会館 二階会議室





受賞俳句

《一般》

市長賞

研ぎあげて刃物やすらふ夜の秋

市議会議長賞

見晴らしの丘の一木つくつくし

教育長賞

蓮の花朝の湖面をゆらしけり

芸術文化協会会長賞

吾亦紅投げ入れおけば壺の添ひ

秀逸

稲扱きの昭和のリズム実験田

ピリオドは確と打つべし吾亦紅

ひと雨のしづけさに葱植えにけり

昏れてなほ明るき川面下り鮎

秋あかね翅に水音ひびかせて

佳

作

濡れ縁で泳ぎのしぐさ水着の子  
梨剥くやくるくる香り広がりにて  
アングレスの塩を肴に月見酒  
砂防ダムまでの道のり花どぐい杖  
審判の帽子にとまる赤蜻蛉  
肘枕寝るには早き夜の秋  
鰯雲手ぶらで帰る仕入れ道  
月を待つ母の形見の下駄履いて

# 応募俳句

1 鳳仙花触れんとすれば種飛ばす  
山住の足首緊る白牡丹  
ひぐらしの調子外れて初めより

2 飛込みの蹴足一瞬雲の峰

市長賞  
研ぎあげて刃物やすらふ夜の秋  
瑠璃光を放つ玉虫死んでをり

佳作  
濡れ縁で泳ぎのしぐさ水着の子  
子子の上へ下へと水使ふ  
ワイパーの機能うしなふ大白雨

4 赤とんぼくるりと先をかへにけり  
新涼や高き脚立にふんばりて  
エプロンを路地に忘れて西日濃し

5 起重機の延びきる空の残暑かな  
安楽てふ佳き名の里や星祭  
施餓鬼寺音信のなき友に会ふ

6 新涼や白鷺水をけつて翔つ  
黒猫のにげぬ構へや秋暑し  
このごろの小巾小さし秋の風

教育長賞  
7 簾戸入れて庭にわきたつ野の匂ひ  
蓮の花朝の湖面をゆらしけり  
夕立のからりと晴れて軒雫

8 カメラアングルバックネットの油蟬  
木洩れ陽や鉄漿蜻蛉低く飛ぶ  
武家屋敷柵を食み出す時計草



佳

作

9 赤とんぼ久那斗神をすれすれに

残る蟬今日をかぎりの声かとも

玄関に漢どかりと新米置く

10 廃校地聳つ古木かんこ鳥

11 夏の果て子のコーヒーはブラックに

梨剥くやくるくる香り広がりに

二学期や上靴急にきつくなり

12 ほはほはの光を浴びて花芙蓉

祖母の蚊帳そつとくぐりて子らの声

階を転がる小石法師蟬

13 木洩れ日におどり通しの女郎花  
芙蓉の実老ひてなつかし父母よ  
横目づかひに忙しく去ぬや無花果畑

14 稻雀群なし飛びてこまわりに  
青田風道いくすじも米どころ  
南瓜取り蔓を飛び越え軸堅し

15 豆絞り今日は主役の秋祭  
自転車を追い越す蜻蛉風が吹く  
山裾は赤や黄となり墓参

16 秋蒔の夫呼び戻す訃報かな  
杉箸の枳目小皿の新豆腐  
ひまはりの種はづしては数へては

佳

作

17 秋蝶の束の間憩ふ石舞台

ニツカポツカ西瓜いつきに齧り付く

アンデスの塩を肴に月見酒

佳

作

18 折り紙のとんぼかまきり秋高し

砂防ダムまでの道のり花どぐい杖

鬼胡桃兼六園の探鳥会

秀

逸

20 稲扱きの昭和のリズム実験田

夏休み家にいながら旅をする

暗闇に鈴虫の音色癒される

19 孟蘭盆会オンラインにて里帰り

新米を運ぶ足音入り乱れ

コロナ禍や色なき風に忍び足

秀

逸

21 秋冷や肩まで入れて壺を挽く

ピリオドは確と打つべし吾亦紅  
どんぐりや神の依代六千坪

22 水泳のゴーグル越しに塩辛よ

星月夜すねに茶トラの擦り寄りて  
コスモスや黄昏の踏切しまる

佳

作

23 小鳥来るはいと返事のまつすぐに

審判の帽子にとまる赤蜻蛉  
萩こぼれ踝に風たちにけり

佳

作

24 きりぎりすおしまひのちよん省略す

肘枕寝るには早き夜の秋  
みんなの今日ある命鳴きつくす

芸文協賞

25 炎暑かな蛇口はどれも天向いて  
吾亦紅投げ入れおけば壺の添ひ  
新涼の風仏間より厨まで

26 農小屋の周り彩るカンナかな  
鰯雲山の端まで泳ぎけり  
艶やかに新米炊く湯気広がりぬ

27 夏の朝原爆映画甦る  
夏果ての笛の練習「千の風」  
佳作 鰯雲手ぶらで帰る仕入れ道

28 ひと雨のしづけさに葱植えにけり  
逸 夕立晴高原の牛しづかなり  
待つ人のいつもの笑がほ芋焼酎

秀

逸

30

雨上がり葉桜きらり峠道  
コロナ禍で街道さみし合歓の花  
夕立ちやひと山晴れて野良仕事

昏れてなほ明るき川面下り鮎

いとど跳ね土間に七輪火消壺

ビルの無き駅前通り銀河濃し

31

ガラス窓大きく拭きて春の空

白詰草小さな靴を踊らせて

月を待つ母の形見の下駄履いて

佳

作

32

香を焚く襖開けおく梅雨の夕

潮風にペタル漕ぐ子の夏きざす

水温むゆったりと鯉の浮びをり

議  
長  
賞

33 食ひ込める手提げの取手秋暑し

山霧のみるみる晴れて嶺尖る

見晴らしの丘の一木つくつくし

34 今年米握る拳のリズミカル

持ち寄りの米積み上げて施餓鬼寺

ぎざぎざの切手の縁や秋の空

35 逆上がりクルリと回り赤とんぼ

取り手無し鈴なりの柿心配し

コスモスや車窓に流る夕暮れは

36 薰風や安楽越の九十九折

志摩半島白波高く夏の海

コロナ禍や突如と上がる大花火

37 休み田の草かがやかに朝の露

ひたすらに水打つとんぼ峡の昼  
新米研ぐ空の青さを厨より

38 日を重ね声に優しさ秋の蝉

一瞬に消えさる笑顔秋出水  
庭に声客にあらねど蝉とまる

39 新涼や母の形見の竜頭巻く

秋夕焼街の真中をはぐれ鹿  
山葡萄酸っぱき昔なつかしむ

逸 40 秋あかね翅に水音ひびかせて

遠きよりとどく鐘の音秋気澄む  
猫じやらし手折る指先風湧きて